

日本海海戦：その情報通信からの視点5 —人間コミュニケーションの輪の中で—

小菅 敏夫

(電気通信大学歴史資料館)

はじめに

日露戦争・・・それは満州（清国東北部）と朝鮮半島をめぐるロシアと列強各国の思惑と利害の対立が原因であった。そして、ロシアのきわめて強引な南下政策に直接の脅威を感じた日本が、専守防衛のためやむをえず戦端を開いたのであった。

その戦争は、人間の意思による人間自身の行為であった。けして大砲や軍艦が勝手に戦争をしたわけではなかった。国家の戦略も戦場での作戦も、人間が収集した情報を基に人間が構想し策定し実行したのである。

日露戦争・・・日露それぞれの思惑もあって、両国ともに望まなかった戦争であった。その戦争を回避すべく、両国間で開戦直前まで、ロシアの首都サンクト・ペテルブルグで、ぎりぎりまでのそして入念な交渉、すなわち人間コミュニケーションが続けられた。

しかし、もともと小国日本が開戦に踏み切るとまでは予想していなかったロシアの交渉態度は不遜で、不幸にして開戦。その直後に日本政府は、それぞれ特使を派遣して、あらかじめ早期講和と、戦費調達の対策を講じた。これも、人間コミュニケーションの成果にまつほかになかった。

戦争遂行、要すれば戦史に著された陸上部隊や艦隊行動のため、それらの個々の戦闘の作戦決定のために、その開始・継続・終了の時期判定のために、そして継続する次の行動の準備のためにも、必要とする情報の収集が必要であったことは改めて述べるまでもない。

その情報の疎通のために必要な有線／無線通信回線が設定され運用された。そして、情報収集のためには、多数の諜報員が暗躍した。その傍ら、あるいは主目的として、相手を攪乱するために偽りの情報が流布され、それぞれの敵の後方で、破壊活動が実施された。

日露戦争・・・その過程で、国民の戦意を高揚させるための広報活動が多彩に展開された。報道は真実を伝えるべきものの、それが戦意を喪失させるものであってはならず、日露ともに管制がなされた。

諸外国の新聞報道は、たてまえ上、中立かつ客観的な報道を旨としながらも、民族間の確執、そして宗教を異にする偏見からかならずしも脱却し切れてはいなかった。また取材活動の制限やニュース・ソースの制約に起因して、それらの報道の中には少なからぬ誤りも散見された。それでも在外の当事国国民は、管制されない情報に接することができた。

そして日本の捷報^{ちようほう}が伝えられるたびごとに、永年の白人による植民地支配の圧制に苦しみ続けたアジア、アフリカそして中南米の人びとは、日本の勝利によって自分たちが解放される日の近いことを期待して、勇気づけられた。

加えて敵対する相手国との間においてさえも、国際条約で定める人道的な問題処理のためのコミュニケーション・チャンネルが設定されていたのである。

双方善戦。血みどろの戦闘の後には、アメリカ大統領の仲介斡旋による講和と戦後復興のために、相互のコミュニケーションの再開が望まれた。

日露戦争・・・畢竟それは人間コミュニケーションに始まり、人間コミュニケーションで推移し、そして終わった。

この人間コミュニケーション、すなわち「人と人お互いが、文化的背景を超えて、情報を求め意思を疎通し合い、あるいは理解し合うための総合的な手段とその過程」の視点から日露戦争、特にその海戦を中心として展望した結果は、以下の通りである。

1. 情報収集と諜報活動／和平工作

“知彼知己百戦不殆（敵を知り己を知れば百戦

あやまたず)”と古代中国の賢人は喝破した。諸葛孔明はもとより、アレキサンダー大王も、そしてわれらの卑弥子も、このことは熟知していた。

“敵を知る”ための情報は、それを必要とする受け手に受容されて、その大脳で処理されてはじめてその効用を発揮する。今日の発達した通信回線もコンピュータも畢竟その補助手段にすぎない。

“己を知る”とは、敵と比較して我が軍の兵力を算定するにとどまらない。相手に関する情報を偏見や先入観にとらわれずに、処理し客観的に評価する行為である。それが可能な“己”の認識にはかならない。これは“敵を知る”以上に難しい。

そして“敵を知り己を知る”ほどに日本政府は、この戦争に勝利することが困難であることを悟った。開戦の直後から和平に向けての工作が始められたのだった。

1. 1 日本側による活動^{[1][2]}

周辺各国に放たれたロシアの諜報員から、日本軍の動向に関してさまざまな情報がもたらされた。とりわけロシア艦隊に不安を与えたのは、日本が同盟国イギリスで多数の水雷艇を建造、これに日本の海軍将兵が乗組んで、ロシア艦隊を襲撃するという情報であった。ロシア海軍の拠点であるバルト海の周辺には望楼が建設され、洋上では哨戒艇が巡視して日本の水雷艇への嚴重な警戒が続けられた。

“日本海海戦：その情報通信からの視点3”に述べられたイギリスでの水雷艇建造云々は、まったく意図的に流されたデマであった。

しかし、日本海海戦に先立つ海戦で日本の艦艇と、それらが放つ下瀬火薬を充填した魚雷の威力を見せつけられたロシア海軍にとっては、日本の魚雷／水雷に関する情報は、恐怖を引き起こす以外のなにもものでもなかった。

したがって、その架空の情報に基づく恐怖が、たとえばロシア艦隊にとって不運な、北海ドッガーバンク事件（・・・視点3”参照）を引き起こす遠因となったのである。

(1) 明石元二郎の活躍

明石元二郎（陸軍大佐）はロシア駐在武官で、開戦直前に駐在武官を退任、ロシアとその諸国で協力者を得て積極的な諜報・宣伝活動を展開した。諜報・宣伝活動のみならず、彼は武器の調達にも協力した。そして皇帝をはじめとする貴族・上流

階級の圧制に苦しむ庶民の不満を糾合させ、蜂起させるのに成功したのだった。これは、もう戦争支援のための諜報・宣伝活動の域を超えている。

もともと情報はその持ち主の脳裏に内蔵されている。人間コミュニケーションの要諦は上述の通り、人と人との相互理解にあるが、持ち主が秘匿したいその情報を収集するためには、それを秘密裏に持ち主から引き出し受け手に伝達するための、多様かつ広範囲にわたる人間コミュニケーションのネットワークが不可欠である。明石は図(5-1(b))に見る通り、そのネットワークを極めて巧みに構成した上で、これを細心に運用したのだった。

ともあれ100年前、情報収集の人間コミュニケーションのネットワークを、ロシアとその周辺の国際間に構成した。そのネットワークの節点となった外国人協力者個々の人物像とその行動については、文献[1]などに詳述されている。そして“敵を知る”ばかりでなく敵を後方で混乱させる明石の計略は、古代中国の賢人をはるかに凌駕していた。

(2) 在外公館の活動

情報収集/伝達の拠点は図5-1(a)のようであった。さらに、図5-1(b)に見るようにロンドン、パリ、ベルリン、ウィーンなどに在った日本の在外公館の公使や駐在武官らが、積極的に活動した。その具体的な活動についても、文献[1]などに述べられている。

(3) 金子堅太郎の対米工作^[3]

開戦と同時に内閣総理大臣伊藤博文は、かつて伊藤内閣で農商務大臣などの閣僚経験のある金子堅太郎をワシントンに派遣した。金子は、時の大統領テオドール・ルーズベルトと大学同期の昵懇の間柄であった。金子には、アメリカの世論を親日的にする工作と、早期和平の調停を大統領に依頼する任務が課せられていた。

1. 2 ロシア側の日本周辺での活動^{[4][5]}

“敵を知り己を知れば・・・”ロシアでも同様のはずである。しかし、そもそも対日戦争への意識が薄かった。

(1) 日本に対する認識

1900年、東京のロシア大使館駐在武官のワノフ

スキイは“日本軍がヨーロッパ軍隊の組織の道徳的基礎を持って、ヨーロッパの最弱の軍隊と同列に入れるやうになるにはざっと百年かかるだろう”と、本国に報告した。またその頃、シベリア第一軍団の参謀長イワノフ大将は“日本軍はあらゆる軍人的特質を缺いてゐる。参謀将校は武器製造に対する知識も理解も持たない”と、批判した。

日露開戦前の駐日ロシア公使ローゼンは、日本に関する詳細な情報を本国政府に送り続けていた。しかし、日本を“東洋の猿”と蔑視していた大ロシア政府は、これらを重要視しなかった。皇帝ニコライ二世には、皇太子時代の1891年に訪問した日本で暴行を受けた大津事件への宿怨もあった。

開戦前年の1903年4月、神戸で行われた日本海軍の観艦式に参列したロシア軍事視察団は“日本海軍の士官や水兵は訓練が不十分である”と報告した。

もともと日本を蔑視している本国政府が、戦争を意識せずに日本の海軍力を正しく認識できるはずもなかった。

(2) 諜報機関の活躍

しかし開戦後は、上述の駐在武官らとは異なった緻密な諜報活動が行われていた模様である。たとえば“・・・視点3”の1905年2月11日と3月4日の項には、第二太平洋艦隊がノシベ湾停泊中に海軍省からの電報で通報された、日本艦隊の動静に関するかなり詳細な情報が記されている。

その内容の信憑性はともかく、日本国内でのロシア側の活発な諜報活動と、日本から第三国経由でロシアに情報を伝送するチャンネルの存在を暗示していた。

これはあるいは、フランス人バレー (Balais*)の暗躍の成果であろう。そのバレーなる人物については、最近のロシア側の文献にまつほかない。すなわち

・・・韓国朝廷のパヴロフ元公使は、戦闘行動の全期間を通じ、我が軍に敵側に関する情報を提供してくれたが、これは同氏が韓国および日本に連絡網を持っていたおかげである。同氏のもっとも有能な在日諜報員の一人が、フランス国籍を有するジャーナリストのバレーである。

すでに奉天会戦(注：1905年3月)以前からであったが、とりわけそれ以後はバレーの日本滞在が極めて危うくなったため、パヴロ

フ氏はバレーを日本から召喚せざるを得ず、もって我が軍は極めて有用な諜報員を失うこととなった。

バレー氏は上海からペテルブルグへ来着、同地から参謀本部により最高司令部へ派遣されてきた(1904年6月30日)

日本語を巧みに駆使し、日本軍のみならず日本の民情、歴史、文学によく通じたバレー氏は、日本軍に関する通報、日本紙からの軍事的内容を持つ論説の翻訳、最高司令部ならびに第一軍、第二軍、第三軍司令部における一連の日本についての講演で、我が軍を利するところ大であった。これら講演は、敵国を表面的にしか知らぬ将校たちの間に頒布すべく、印刷に付された。

(*編集注:2004年10月24日付“Japan Times”にBalaisについての関連記事あり)

1904年6月に上述の乃木第三軍が遼東半島に上陸すると、旅順から奉天-ハルビン経由でロシアに通じる電信回線を切断した。それに先立って開戦劈頭、日本海軍は旅順-芝罘間の海底ケーブルを切断していた。連合艦隊は、すでに旅順港を海上封鎖していた。ここに至って、旅順は情報的に孤立した。

(3) ロシア側の芝罘無線電信局建設計画^[5]

旅順から黄海を間に、対岸の山東半島突端の芝罘まで80マイル(150km)。そこにあるロシアの総領事館までを密かに水雷艇を走らせ、あるいは清国人のジャンクを雇い上げて通信連絡に使用した。時には伝書鳩を飛ばせたりしようと試みた。

芝罘駐在のロシア総領事チデマンは、これらの姑息な通信手段を抜本的に改善すべく、領事館内に無線電信局を設けて、旅順の老鉄山無線電信局(“・・・視点2”参照)との間に無線電信回線を設定しようと計画した。日本海軍は、この計画を徹底的に妨害しようと試みた。

無線電信機ニ關シ取調ヘタルニ彼(注：ロシア側)ハ北隍城島ニ中間局を設置シ當露國領事館ト連絡ヲ通セントスルモノ、如ク之ニ對シ我カ國ノ取ルヘキ處置ニ就キ相談ノ末水野領事ヨリ外務大臣ニ意見伺ヒ出タルニ付右ノ趣御承知アリタシ

海軍軍令部はこのことを東郷司令長官に通報した。6月4日、海軍省は芝罘駐在武官の森中佐か

ら報告を受けた。

無線電信機ノ件本日迄外面ニハ何等設備ヲ認メスト雖モ露國領事館外部ニ器具材料到着シタルコト及ヒ其ノ器械ヲ内密ニ検査シツ、アルコトハ事實ナルカ如ク彼ハ昨今家屋内ニ電燈ヲ据附クト世間ニ云ヒ振ラシ始メタリ・・・。

2. 専門家の視点

日露戦争は衆人監視、とりわけ従軍外国武官（あるいは観戦武官）の観察と軍事専門家の批評のもとに行われた。

2.1 外国皇族／観戦武官による観戦^[6]

日露戦争に注目して、ドイツからは皇族が諸外国からは観戦武官が日本とロシア双方の戦線を訪問した。

(1) ドイツ皇族の訪問

ドイツ皇族として、ロシア大本営へはフリードリッヒ・レオポルド親王、日本の大本営へはカール・アントン親王がそれぞれ来訪した。

カール・アントン親王は1904年10月から翌年4月まで、満州の戦線を視察した。

(2) 外国武官による観戦

①陸軍：ハミルトン（イギリス陸軍中將）、ニコルソン（同）、バーネット（同）、マッカーサー（アメリカ陸軍少將：ダグラス・マッカーサーの父）、ベルテルパシャ（トルコ陸軍少將）、以下多数。

②海軍：ペケナム（イギリス海軍大佐）、ジャクソン（同）、ガルシヤ（アルゼンチン海軍大佐）、トルムレル（ドイツ海軍中佐）、サンパイオ（ブラジル海軍中佐）、

マルチニー（フランス海軍大尉）、マーブル（アメリカ海軍大尉）、ブリザリ（イタリア海軍大尉）、コロレド（オーストリア・ハンガリー海軍大尉）。

ペケナムは戦艦「朝日」の艦上で、重傷を負いながらも、日本海海戦の経過をつぶさに観戦し続けた。

日本が迎えた外国武官は13カ国で陸海軍計70名以上にのぼるとみられ、その国別の人数は次表の通りである。

表：従軍武官国別・陸海軍別人数抄（76名）^[6]

国	別	陸軍	海軍	合計
イ	ギリス	27	5	32
ア	メリカ	11	1	12
ド	イツ	8	1	9
フ	ランス	5	1	6
ス	ペイン	3		3
オーストリア・ハンガリー		2	1	3
イ	タリア	1	1	2
ス	イス	2		2
スウェーデン／ノルウェー		2		2
ブ	ラジル	1	1	2
チ	リ	1		1
アルゼンチン			1	1
ト	ルコ	1		1

アジアに利害を有する国々はもとより、かならずしも直接の関係をもたない国も含めて多数の国の武官が、この戦争を観戦して戦略・戦術・戦況それに武器などについて本国へ詳細に報告した。

2.2 軍事専門家の論評

日露戦争は、当然のことながら各国軍事専門家の注目の的となった。

(1) マハンの論評

マハン（アメリカ海軍大佐、海軍兵学校教授）は1905年5月上旬に予想的評論を発表し“接近戦は冒険的”と警告した。東郷司令長官はその接近戦で勝利をおさめた。

(2) 『サイエンティフィック・アメリカン』の論評

『サイエンティフィック・アメリカン』が1905年4月22日“ロジェストヴェンスキー提督の使命と、その勝敗の予測”と題する記事を掲載した。

(3) イギリス専門誌の予測と賛辞

『エンジニアリング』も“ロシア艦隊の優位”を予測した。しかしその予測を覆して日本艦隊が勝利すると「日本海々戦ニ於ル無線電信ノ効用及ヒ速力ノ價値」と題して論評した。曰く

・・・此等特設船舶（注：第二太平洋艦隊の輸送船）ハ五月二十五日ヲ以テ呉淞沖ニ現レ艦隊ハ同日朝鮮海峡ニ達スヘキ筈ナリシヲ故ラニ遷延シテ二十七日拂曉漸ク同方面ニ現

レタリ而テ其ノ際日本ノ哨艦ヨリ無線電信ヲ以テ敵艦隊ノ來航ヲ警報シタルヲ以テ東郷大將ハ疾ク之ヲ知ルコトヲ得タリ・・・

・・・ロジェストウエンスキー中將ノ任務ハ東郷大將ノ任務ヨリモ更ニ困難ナリシト謂フヘシ彼ハ自カラ交戦ノ場所ヲ選定シ又其ノ場所ニ適中スヘキ諸般ノ準備ヲ爲スノ自由ヲ有セサリシナリ之ニ反シテ東郷大將ハ豫メ哨艦ヲ諸方ニ出シ無線電信ヲ以テ敵情ヲ知ルコトヲ得タリ・・・

・・・日本哨艦カ無線電信ヲ以テ彼ノ行動ヲ其ノ本隊ニ通信シ居ルコトハ露國司令長官既ニ自己ノ無線電信機ニ感動ヲ生スルヲ以テ之ヲ知レリ加之彼ハ現ニ日本ノ哨艦ヲ目撃シタルナリ然ルニ彼ハ偵察艦ヲ放チテ敵情ヲ探知スルコトヲ謀ラス・・・^[7]

またR. フレマントル海軍大將は『ユナイテッド・サービス・マガジン』誌上に、トラファルガー海戦(1805年)などの例を引用しながら、長文の論文を発表した。その一節

・・・東郷大將ノ戰術ハシーブドッグタクチックス「牧羊家ノ番犬カ羊群ヲ監守シテ之ヲ逸セサルニ似タリ・・・」^[7]

3. 世界が目撃した海戦

1904年2月：日露開戦劈頭の仁川沖海戦でロシア艦隊敗退。4月：ロシア太平洋艦隊の旗艦「ペトロパウロフスク」が旅順港外で触雷沈没、マカロフ司令長官戦死。5月：ロシア第二太平洋艦隊艦編成、ロジェストウエンスキー少将(リバウ出航直後中將に昇進)司令長官に。8月：“黄海海戦”と“蔚山沖海戦”でロシア太平洋艦隊全滅。

この情勢の下で10月、ロシア第二太平洋艦隊、旗艦「クニャージ・スウォーロフ」以下リバウ出航。その出航直後に北海でイギリス漁船を誤砲撃。12月：日本軍は占領した二百三高地から旅順港内のロシア太平洋艦隊を砲撃、かろうじて脱出した戦艦「セヴァストポリ」が港外で坐礁し大破した。

1905年1月：旅順開城。極東での劣勢を挽回すべくロシア第三太平洋艦隊編成、司令官ネボガトフ少将、旗艦「ニコライ一世」以下急遽派遣。この間ロシア第二太平洋艦隊、マダガスカル島ノシベで焦燥裏に同艦隊を待機。3月：奉天陥落。第二太平洋艦隊ノシベを出航、一路インド洋を東進。

4月：同艦隊シンガポール沖通過。5月：ロシア第二・第三太平洋艦隊、インド支那半島沖で合流し日本近海へ向う。これに対して日本艦隊、東郷司令長官、旗艦「三笠」に座乗し、対馬海峡でロシア艦隊を迎撃した。

・・・情報は逐次、世界的な通信網(“・・・1”参照)を経由して世界を駆け巡った。

3.1 マスコミによる報道

アメリカ、イギリスのジャーナリストによる取材と報道が活発に行われた。情報は上記の通信網を通じて、ほぼリアルタイムで伝送された。それに対する反応も鋭敏だった。

(1) 「海門号」によるタイムズ社の無線取材活動^[5]

1904年4月15日、ロンドンの『タイムズ』本社に、日露戦争の歴史的な自社第一報が入電した。

いま、タイムズの船『海門号』に乗って南浦(注：現北朝鮮ピョンヤン南西)に向かっている。(日露戦争で)これまで報じてきた戦闘は、氷が急速に溶けるがごとく、激しくなっていくだろう・・・(『産経新聞』平成16年5月26日)

日露開戦の翌3月、イギリスの『タイムズ』社は、香港の汽船「海門号」(311トン)をチャーターしアメリカのデ・フォレスト式無線機を装備した。

その無線機を用いて、イギリスが中国から租借していた山東半島威海衛の海軍基地に設置した無線局を経由して、日本艦隊に密着取材したなまなましい記事を、船上からロンドンの本社に直接伝送することを企画し、成功したのだった。

記事は特派員兼同船船長のライオネル・ジェームズが書いた。アメリカ人の通信士を雇った。イギリス海軍のコフン中佐も乗船した。日本側からは無線監督として外波海軍中佐が、通訳田中倉吉と称して乗り組んだ。

しかし、戦闘海域における「海門号」の取材範囲と通信運用に関する、日本陸海軍の制約条件は、もとより厳しかった。加えて、ロシア側からは“日本のスパイ船”と警戒され臨検を受けた。

結局タイムズ社は、ジェームズ記者を9月に香港で下船させ、この画期的な海戦取材活動は、翌年の日本海海戦を待たずにして終わった。

(2) 『タイムズ』の記事

『タイムズ』は、ドッガーバンク事件(“・・・視点3” 参照)について次のように酷評した。

・・・海軍軍人と称する者が——いかに恐怖に駆られていたとは言え——射撃目標が何であるかを確かめもせず、20分間にわたって漁船群に砲撃を加え得たということは、とうてい想像し難いところである。さらに想像し難いことは、ある文明国の軍服を着用している士官たちが大艦隊の大砲でもって憐れな漁夫たちを打ち殺し、かつ彼らの許し難い過ちによる犠牲者たちを救助しようともせず、立ち去ろうとしているのだ、という事実を疑ってみることができなかつた点である・・・。その『タイムズ』紙がロシア艦隊のシンガポール通過を目撃して、次のように論評した。

・・・ロシア艦隊は北海事件をひき起してわがイギリスに大きな苦痛をあたえた。しかし、ロシア第二艦隊が、危険をおかしてインド洋からマラッカ海峡を通過し堂々とシナ海に陣を進めたことは驚嘆のほかない。・・・わがイギリス国民は、同艦隊の目ざましい壮挙に対して感嘆と賞賛を贈るものである。勇壮きわまりない同艦隊の行動は、ロシア艦隊乗組員の熱烈な祖国愛をしめすものであり、日本海軍との決戦に臨む戦意はきわめて高いものと判断される。(吉村 昭『海の史劇』新潮社)

このほか『タイムズ』には多数の論説や記事が掲載された。

(3) 『NYタイムズ』の記事^[7]

第二太平洋艦隊のシンガポール沖通過(“・・・3” 参照)を『NYタイムズ』は、きわめて客観的に次のように表現した。

・・・47隻の艦船が横に四列にならび、舷側に長く伸びた海草を引きずり、頭上に濛々たる黒煙をたなびかせ、速力8ノットでゆっくり航進する有様は、人々の目を奪うものがあった。しかし艦艇は長い航海のあとを歴然と見せていた……軍艦の甲板には石炭が搭載されており、一方、艦隊に随伴している石炭輸送船で旧ハンブルク・アメリカ汽船会社の喫水は浅く浮いていた……砲員や対潜要員は一日中、砲側や機雷の側に配置されていた。バルチック艦隊はシンガポール港の境界線に

は近づかなかつたので、礼砲の交換は行われなかつた。艦隊は午後5時(注: 4月8日)ごろ水平線の彼方に姿を没したが、東の空には、まだ黒煙が立ち上っていた。

(4) 民族意識の高揚^[8]

日本人が意識したわけではなかつた。しかし、満州でそして日本海での日本軍の勝利が、白人の圧制に苦しんできた有色人種の民族意識を高揚させた。

『シアトル・リパブリカン』紙

・・・白人優位の現実が、黒人の目を満州やムクデン(注: 奉天、現瀋陽)あるいはその周辺に向けさせはじめた・・・。

『ニューヨーク・エイジ』紙

・・・さあ、行け、小さな茶色い男たち。攻めて攻めて攻めまくれ。鋭い剣をさやに納めず、天罰を与えつづけるのだ。お前たちは、天地をひっくり返した。ロシアをやったんだ。プライドと力におぼれる、ほかの連中に同じ道をたどらせるのも、お前たちなのだ。

『インディアナポリス・フリーマン』紙

東洋のリングで、茶色い男たちのパンチが白人を打ちのめしつづけている。事実、ロシアは繰り返し何度も、日本人にこっぴどくやられて、セコンドは今にもタオルを投げ入れようとしている。有色人種がこの試合をものにするのは、もう時間の問題だ。長く続いた白人優位の神話が、ついに今突き崩されようとしている。

アジア民族の独立の希望

『読賣新聞』は日露戦争100周年の特集記事で、日露戦争の結果、日本が当時植民地支配の下にあった、同じアジアの人びとに与えた、およそ当時の日本人の意識の外にあったであろう、インパクトについて報じている。

日本がロシアに勝ったことは、欧州列強に植民地支配されていた多くのアジア諸国を勇気づけ、フランスの植民地だったベトナムでも、祖国解放を求めて一人の男が立ち上がった。日露戦争に感化されて日本に渡り、抗仏闘争の足場を築こうとしていた ファン・ボイ・チャウ(1867-1940)だ。そのもくろみは結果的に挫折するが、チャウの生涯は、ベトナム人の民族自決を初めて追及した先駆者として記憶されている。

・・・(犬養 毅や大隈重信らと面会しチャウは、ベトナムの抗仏闘争のために、日本が武器を援助してくれるよう頼む。植民地支配を打ち破るには、武力革命しかないというのが彼の持論だった。

しかし日露戦争後にフランスと同盟した日本にとって、抗仏闘争を主導するチャウは好ましくない人物となった。彼は1925年、上海で逮捕されハノイで刑務所に収容された。彼は日本政府の変心に失望した。記事は続く。

「日露戦争役以後、黄白人種の闘争はようやく私達の睡魔を驚かし、わが党志士がフランスに復讐し、ベトナム国の光復を想うの気焰は一段と盛んになりました」。

後の「獄中記」(平凡社刊)にチャウは書いている。

・・・こうして始まったベトナム人青年の日本留学を「東遊(ドンズー)運動」と呼ぶ。チャウの呼びかけに応じてベトナム各地から日本に留学し、政治や軍事を学んだ青年は約二百人に及んだ。日本が、ベトナムの抗仏闘争を束ねる発信基地となったのだ。日露戦争に影響を受けたのはベトナムに限らない。エジプト、ペルシャ、トルコ、そしてインドで独立運動が盛り上がった。中国革命の指導者孫文は1924年に神戸に立ち寄った際の講演で、「日本が勝利した結果、アジア民族の独立という大きな希望が生まれた」と回想している。・・・(2004年12月25日)

中国からは、辛亥革命(1911年)から昭和11(1936)年までの間に、正規の留学生が24回送られてきている。中華民国初期の高級軍人の9割が日本留学組であった。その3分の1は中将以上であった。蒋介石や張群は「振武学校」留学組である。『支那陸海軍将官名簿』(日本陸軍参謀本部)によれば、「将官クラス現役軍人275人中、88人、32%が日本陸軍士官学校出身者であったという。(「日露戦争後に来日したアジアからの留学生」高木桂蔵『日本海海戦100周年記念歴史セミナー講演要約集』1000人委員会、2005年5月)。

なお、1924年の神戸の講演で孫文は

“・・・日本の皆様は、すでに欧米の覇道(注:侵略主義)の文化をわがものとしていられますが、また、アジアの王道(注:平和主義)文化の本質をももっていられます。

今日以後、世界文化の前途にたいして、結局、西方覇道の手先の犬鷹になるか、または、東方王道を守る干城となるか、日本国民の皆様において十分慎重に考えて、選択していただきたいものです・・・”(貝塚茂樹『中国の歴史・下』岩波新書)と警告したのだった。しかし、此の警告は生かされなかった。

そして、日露戦争によって触発されたアジアの人びとの民族意識は、大東亜戦争の後に、開花・結実した。

3.2 作家の感性を通して

文学、それは人間の心からの叫びの表現。その文学によって研ぎ澄まされた作家の感性が、特定の海戦にとどまらず、戦争の本質そのものに鋭く向けられた。

(1) トルストイ——“兩國の労働人民にこそ味方する”——

1853年、日本にアメリカの黒船が来航したその年、ロシアとトルコの間にはクリミア戦争が勃発、ナポレオン率いるフランス軍とイギリス軍がトルコ軍に荷担した。その戦争末期の黒海セヴァストポリ攻防戦(1855)、レフ・トルストイ(1828-1910)が青年将校として参戦していた。やがて彼はその苦い敗戦の体験を『セヴァストポリ物語』として上梓する。そしてトルストイは、1805年から12年間に及ぶナポレオン戦争を背景としたロシアの一大叙事詩『戦争と平和』を1869年に4年間にわたる歳月を費やして完成させた。

そのトルストイは開戦翌年の1904年2月、アメリカの新聞社の質問に“私は、ロシアにも日本にも、味方しない。政府によって欺かれ、良心、宗教、及び自己の安寧に背いて戦ふことを強ひられたる、兩國の労働人民にこそ味方する”と答えた。(「日露戦争について」『トルストイ全集』47、講談社、昭和30年)

そして5月、上述の戦艦「ペトロパウロフスク」の接雷沈没を契機に日露戦争そのものを真っ向から批判する一文を草した。(「思い直せ」『タイムズ』6/26)

私は、マカロフやその他の将校たちのことを指して言っているのではない。これらの人々はすべて、彼らが何事を何の目的でなしたかを承知していた。そして彼らは、自発的に、

個人的利益のために、あるいは彼らが持っていた野望のために、表面的な愛国心——これは世界中いたるところで見られるものであるとの理由から非難されない仮面——をかぶることによって、彼らをつつみ隠した……

私はむしろ、ロシア各地から引っぱり出されてきた、それらの不幸な人々のことに言及したい。彼らは宗教的不正手段により、また罰せられるかも知れないとの恐怖のもとに、正直で、合理的で、社会にとって有用かつ勤勉な家族から引き離されて、世界の果てに押しやられ、無意味な大量殺人機械のもとに置かれ、こっぴ微塵に身を吹きとばされ、遠くの海上でこの無意味な機械と一緒に溺れ死んだが、彼らはその窮乏、努力、苦痛あるいは彼らを襲った死から、利益を得る必要もなければ、またその可能性もなかったのである^[3]。

(2) ジャック・ロンドン

『野生の叫び』で有名な行動する作家ジャック・ロンドンが1904年8月の黄海海戦を観戦した。

3. 3 日本の文壇／マスコミ

(1) 文芸雑誌

1904年2月の開戦と同時に日本の文壇は主戦と反戦あるいは非戦に二分された。評論家や作家がその論戦の先頭に立った。

『中央公論』戦時色を濃厚に

明治20年に『反省会雑誌』として創刊された『中央公論』は開戦以来、戦時色を濃厚にした。その1904年3号(4月号)に軍事評論家が寄稿した主戦の論調；

・・・仁川の海戦、旅順の海戦ありし今日に於いてすら、非戦論を主張する者あり。われ等は、吾が帝國の海軍が、仁川沖に於いて勝利を占め、旅順口を砲撃して、殆ど陥落に等しき窮状に沈ましたるを見て、遽かに非戦論者を攻撃するものにあらず。・・・吾人は平和の天地を理想とす。されど其の平和の現實を攪亂せむとするものあらば、平和のために、彼れを撃退せざるべからず。露國最近の行動は、たゞ夫れ自利を貪るのみにて、平和の爲に計策する所なし。・・・満州に於ける

暴行、詐譎、これこれ正義にかなふものなりや。

・・・一個人の安全を謀る上に於いても、角闘は必要なるにあらずや。非戦論者と雖も、自身の安危のためには防禦の手段を講ぜざるに非ずや。國家に於いても亦然り。而して國家の安危得失は、一個人の安危得失の懸る所なり。これ三才の兒童と雖も、了解する所にして、今更喋々するの必要もなかるべし。・・・(成川生“非戦論者に與ふ”)

また主戦論を支援すべく、同誌1904年9号と10号(10月および11月号)に松代松之助が「無線電信の話」と題して、海軍の「三六式」無線電信機について図面を含めて紹介した。

・・・其電氣波(注：電波)とはイーザー(注：エーテル。空間における電波の伝搬媒体と当時考えられていた)に起る波動で、其又イーザーとは、我々の肉體にも周圍にも物體の間隙にも空氣の間隙にも、月の世界から日の世界から総て其中間に至るまで此宇宙に充滿して・・・。

・・・送信機より電氣波が來て之れが爲に此垂直線(注：受信アンテナ)に振動的電流が起るや否や、此コヒーラーの電氣的抵抗が減じて・・・。

などなど、戦意高揚に向けて文芸誌の読者に先端技術の無線電信を理解させようと、技術者が苦心惨澹した様子がうかがえる。

『新潮』創刊“軍國の文學を見よ”

5月には“軍國の文學を見よ”をスローガンに、文芸雑誌『新潮』が創刊された。評論に加えて戦意高揚を標榜した十数篇の小説が掲載された。

その内の一篇、尾崎紅葉門下の小栗風葉『武装商船』では、ロンドンで日露開戦を知った欧州航路の貨客船が俄かに武装し、帰路アフリカのケープタウン沖で、勇敢な船長の指揮のもとに、ロシアの軍艦を襲撃する。

銃後の誉れ

開戦1年後の4月、満州軍総司令官大山巖夫人の大山捨松は、かつて留学したアメリカの週刊誌『コリアーズ・ウィークリー』に「日本婦人戦時の働き」を寄稿した。曰く

・・・私たちはまさに生存のために戦っています。その大義は合法かつ正当です。何年

かかろうとも、私たちは必ずや勝利を収めます。(『讀賣新聞』2004. 8. 28)

木下尚江 “戦争で第一に金儲するのは誰だ”

そして評論家から“三才の兒童”扱いされた非戦論者、その旗頭である木下尚江は小説『火の柱』(平民社、明治37年5月)を出版、労働運動と言論の自由を主張しながら非戦論を展開した。その一節；

「社會主義大演説會」の看板を掲げた演壇上”戦争で第一に金儲するのは誰だか、諸君、知ってますか”。“(主戦論者) 諸君が露西亞討たざるべからずと言ふけれども共ダ、露西亞の何物を討つと言ふのです?”と、官憲の制止をものともせず、聴衆に訴える。

また、労働新聞の主幹を陥れようと“露探”のぬれぎぬを着せられようとするあたりに、戦時下における国内の、誰が敵か味方か? 混沌とした雰囲気表現されている。

与謝野晶子 — “君死にたまふことなかれ” —

声高な主戦論の渦中で、明治文壇の才媛与謝野晶子は“旅順包圍軍の中に在る弟を歎きて”と傍題した、非戦の詩を高らかに歌い上げた。

あゝをとうとよ君を泣く
君死にたまふことなかれ
末に生れし君なれば
親のなさけはまさりしも
親は刃をにぎらせて
人を殺せとをしへしや
……

君死にたまふことなかれ
すめらみことは戦ひに
おほみづからは出でまさぬ
かたみに人の血を流し
獸の道に死ねよとは
死ぬるを人のほまれとは
…

(『明星』明治37年夏季(辰歳)號)

この詩を大町桂月は“国家観念を藐視した危険な思想・・・”と批判した。晶子を擁護する論調もあった。晶子も「ひらきぶみ」で作家としての自身の立場を明らかにした。大塚楠緒子は晶子に触発されて“お百度詣で”を書いた。

(伊藤 整『日本文壇史』8、日露戦争の時代、

講談社文芸文庫)

『太陽』

明治28年に東京博文館が創刊した『太陽』誌上でも開戦とともに、主戦、非戦さまざま論調が展開された。上述の与謝野晶子の“君死にたまふことなかれ”に対する大町桂月の批判も、大塚楠緒の“お百度詣で”も、この『太陽』に掲載されたのである。

それらの中で、開戦翌頭4月のマカロフの戦死(“・・・視点2”参照)を悼む石川啄木の108行におよぶ次の長編詩が人びとの注目を集めた。

石川啄木 マカロフ提督追悼(部分)

嵐に黙せ暗搏つ其翼、
夜の車も、荒磯の黒潮も、
潮にみなぎる鬼哭の啾々も
暫し唸りを鎮めよ、萬軍の
敵も味方も汝が矛地に伏せて、
今大水の響きに我が呼ばふ
マカロフが名に暫しは鎮まれよ
彼を沈めて千古の浪狂ふ
弦月遠きかなたの旅順口。

・・・

ああ偉いなる敗者よ、君が名は
マカロフなりき。非常の死の波に
最後の権威ふるへる人の名は
マカロフなりき。胡天の孤英雄、
君を憶へば、身はこれ敵國の
東海遠き日本の一詩人、
敵ながらに苦しき聲あげて
高く叫ぶよ、(鬼も跪づけ、
敵も味方も汝が矛地に伏せて、
マカロフが名に暫しは鎮まれよ)

・・・

我はた惑ふ、地上の永遠は、
力を仰ぐ有情の涙にぞ、
仰ぐ力に不斷の永生の
流轉現する尊き閃きか。

ああよしさらば、我友マカロフよ、
詩人の涙熱きに、君が名の
叫びにこもる力に、願くは、
君が名、我が詩、不滅の信とも
慰めて我れこの世に戦はむ。

・・・

水無月くらき夜半の窓に凭り、

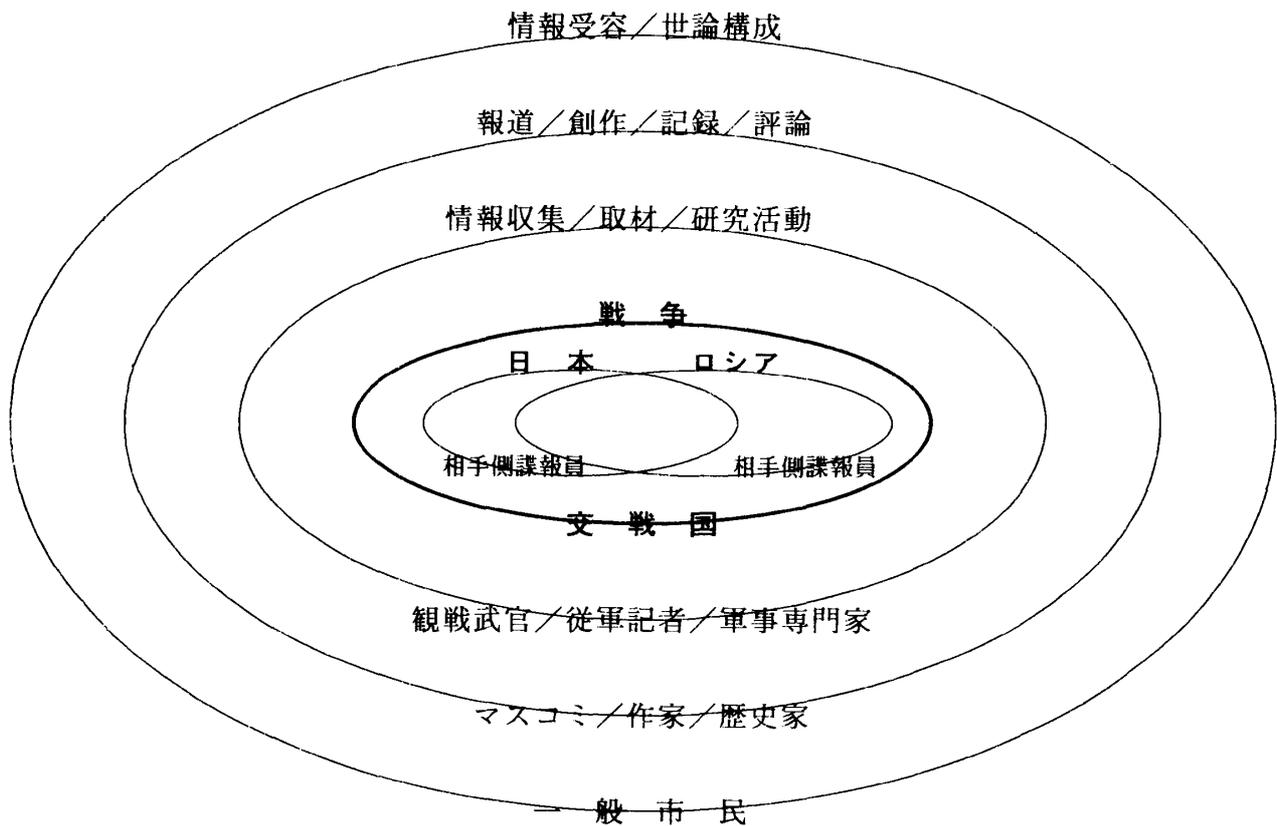


図5-4：日露戦争をめぐる人間コミュニケーションの輪

燭に背きて、静かに君が名を
思へば、我や、音なき狂瀾裡、
親しく、君が渦巻く死の海を
制す最後の姿を観るが如
火影も凍る默肅の思ひかな。
君はや逝きぬ、逝きて猶逝かぬ
その偉いなる心はとこしへに
偉靈を仰ぐ心に絶えざらむ。
ああ夜の嵐、荒磯の黒潮も、
敵も味方もその額地に下げて、
火焰の聲をあげてぞ我が呼ばふ
マカロフが名に暫しは跪づけ、
彼を沈めて千古の浪狂ふ
弦月遠きかなたの旅順口。

(第十卷第十一号、明治37年8月)

師である与謝野鉄幹も注目した天才詩人の19才の詩作である。アメリカの海の詩集である『Surf and Wave』に影響された(『新潮日本文学辞典』新潮社)多感な青年詩人は新聞で読んだマカロフ戦死の記事から“我友マカロフよ”とまで、感情移入したのであろう。もとより両

者は面識がない。

しかし“・・・彼を沈めて千古の浪狂ふ 弦月遠きかなたの旅順口”。この詩を、日本海海戦で祖国のために戦い、そして万斛の無念を胸に東洋の海深く沈んだ、マカロフはじめロシアの多数の将兵たちの鎮魂の詩としたい。

(2) 新聞

開戦と同時に多数の新聞記者が前線で取材活動を行った。特派員となった作家も少なくなかった。

志賀重昂、岡本綺堂、田山花袋・・・それに俳人の正岡子規も特派員として満州に赴いたという。

新聞の紙面は連日、戦況に関する報道で埋めつくされた。戦捷を報じる号外も頻繁に発行された。

むすび

すでに述べた日露戦争全般を通じて行われた、人間コミュニケーションの態様を分類すれば図5-4の通りとなる。

①それぞれ相手国側に諜報員を送り込んで情報収集活動を行って戦略構想と戦術作戦の企画立案

のための情報とした。併せて、相手側の諜報宣伝と破壊活動に従事させた。

②日露両国とも、それぞれの同盟国あるいは中立国の観戦武官が戦場で戦闘場面を観戦することを認めた。それぞれの国の軍事上の貴重な参考資料とされた。また新聞社から従軍記者の派遣も認めた。これらがもたらす情報を基に、軍事専門家が、両国の基本戦略と各戦闘場面での戦術を論評し、あるいは学術上の研究を行った。

③両国政府からそれぞれ広報される情報に加えて上記②の情報に基づき、新聞や雑誌が刊行された。創作活動が行われ、歴史が語られた。またこれらの文筆家の立場から、戦意高揚のための、あるいは反戦／非戦を主張する、論調がなされた。

④一般市民は新聞や雑誌あるいは書籍などで伝えられる情報を受容した。その受容を通して、反戦／非戦の広範な世論が構成された。軍部の"我が軍大勝利"との偏向した情報が報道されたので、講和会議での賠償が少ないとして激昂する市民も少なくなかった。

また国際条約に基づく、捕虜交換や病院船認定など人道上の問題処理に必要なコミュニケーションのチャンネルは、交戦中でも両国の間で確保された。そして捕虜たちと、収容所が設置された地域住民との、心あたたまるコミュニケーションも伝

えられている。

文 献

- [1] 谷 壽夫『機密日露戦史』原書房、昭和41年
- [2] 稲葉千晴『明石工作』— 謀略の日露戦 — 丸善ライブラリー 158、平成7年
- [3] デニス・ウォーナー、ペギー・ウォーナー共著／妹尾作太男、三谷庸雄共訳『日露戦争全史』時事通信社、昭和53年
- [4] D.B.パヴロフ・S.A.ペトロフ（第一部共著）、E.B.チェレヴァンコ（第二部編）／左近毅訳『日露戦争の秘密』成文社、1994.
- [5] 海軍軍令部『明治三十七八年海戦史』第四部
- [6] 安岡昭男“日露戦争と外国観戦武官”政治経済史學、第四三八・四三九合併號、2003年2・3月
- [7] 海軍軍令部『明治三十七八年海戦史』第十二部巻二十二
- [8] レジラルド・カーニー著、山本 伸訳『20世紀の日本人』五月書房、1995. 8
- [9] 『朝日新聞 — 重要紙面の75年 —』朝日新聞社、昭和29年

風 速 換 算 表

太平洋学会事務局

mph	knot	mps	mps	mph	knot	knot	mph	mps
30	26.1	13.4	15	33.6	29.2	20	23.0	10.3
40	34.8	17.9	20	44.7	38.9	30	34.5	15.4
50	43.4	22.3	25	55.9	48.6	40	46.0	20.6
60	52.1	26.8	30	67.1	58.3	50	57.6	25.7
70	60.8	31.3	35	78.3	68.0	60	69.1	30.9
80	69.5	35.8	40	89.5	77.8	70	80.6	36.0
90	78.2	40.2	45	100.7	87.5	80	92.1	41.2
100	86.9	44.7	50	111.9	97.2	90	103.6	46.3
120	104.3	53.6	55	123.1	107.0	100	115.1	51.4
140	121.6	62.6	60	134.2	116.6	120	138.1	61.7
160	139.0	71.5	65	145.4	126.3	140	161.1	72.0
180	156.4	80.5	70	156.6	136.1	160	184.2	82.3
200	173.8	89.4	75	167.8	145.8	180	207.2	92.6
220	191.1	98.3	80	179.0	155.5	200	230.2	102.9
230	199.8	102.8	90	201.4	175.0	210	241.7	108.0
240	208.5	107.3	100	223.7	194.4	220	253.2	113.2

mph = miles per hour (時速 1,609 メートル) knot = 時速 1,852 メートル mps = meters per second (秒速)

International Time Calculator for the Pacific Islands

	UTC	DST	JST	UTC	
American Samoa	-1100		-2000	+0800	East Timor
Canton Is.(see phoenix Is.)				+0900	(Tokyo)
Christmas Island	+1400		+0500		Palau
Chuuk	+1000		+0100		West Papua (Jayapura)
Cook Islands	-1000		-1900	+1000	Chuuk
East Timor	+0800		-0100		Guam
Easter Is.(see Rapa Nui)					Papua New Guinea
Fiji	+1200		+0300		Saipan (CNMI)
Guam	+1000		+0100		Yap
Hawai'i	-1000		-1900	+1030	Lord Howe
Johnston Island	-1000		-1900	+1100	Kosrae
Kiribati (Tarawa)	+1200		+0300		Pohnpei
(also see Christmas and Phoenix)					New Caledonia
Kosrae	+1100		+0200		Solomon Islands
Lord Howe	+1030	+1100	+0130	+1130	Norfolk Island
Majuro	+1200		+0300	+1200	Fiji
Marquesas Islands	-0930		-1830		Kiribati (Tungaru only)
Marshalls (see Majuro)					Marshall Islands
Midway Island	-1100		-2000		Nauru
Nauru	+1200		+0300		Tuvalu
New Caledonia	+1100		+0200		Wake Island
Niue	-1100		-2000		Wallis et Futuna
Norfolk Island	+1130		+0230	+1300	Norfolk Island
Palau	+0900		0000		Tonga
Papua New Guinea	+1000		+0100	+1400	Christmas (Kiribati)
Phoenix Islands	+1300		+0400	-1100	American Samoa
Pitcairn Islands	-0830		-1730		Midway (U.S.A.)
Pohnpei	+1100		+0200		Niue
Rapa Nui	-0600	-0500	-1500		Samoa
Saipan (CNMI)	+1000		+0100		Tokelau
Samoa	-1100	-2000		-1000	Cook Islands
Solomon Islands	+1100		+0200		Hawai'i
Tahiti	-1000		-1900		Johnston.(U.S.A.)
Tarawa (see Kiribati)					Tahiti
Tokelau	-1100		-2000		Tuamotu
Tonga	+1300	+1400	+0400	-0930	Marquesas Islands
Tuamotu Islands	-1000		-1900	-0830	Pitcairn
Tuvalu	+1200		+0300	-0600	Rapa Nui (Chile)
Vanuatu	+1100	+1200	+0200		
Wake Island	+1200		+0300		
Wallis et Futuna	+1200		+0300		
West Papua(Jayapura)	+0900		0000		
Yap	+1000		+0100		

UTC = Universal Time, formerly GMT.

DST = Daylight Saving Time

JST = Japan Standard Time